横芝の碑（その七十一の一）

稲荷信仰と児童施設

〈碑が伝える黒野さんの陰徳〉

横芝駅周辺は昔から東町と呼ばれています。この町内には町立の児童館と保育所が同じ敷地内に仲良く並んでいます。そのすぐ隣には稲荷様が建っていますが別に境内の区切りもないので、一寸と見ますと、児童館や保育所の敷地に借地住まいをしているようです。ところがそれは反対で、稲荷様が地主なのです。稲荷様の鳥居を潜ったすぐ左の児童館寄りに建っている一・五メートル程の碑がそのことを物語っています。碑の表には〝昭和四年初午、奉納敷地一円、黒野たか殿〟また裏面には、黒野たか殿奉納敷地一円は部落民の集合健全なる幼児の遊戯場その他町政振興の施設に寄与すること寔（まこと）に大なるものがあります。女史の陰徳の発現によるものと茲（ここ）に謝意を刻する。昭和三十八年十一月、横芝町長伊藤績夫〟と刻まれています。

▲ 敷地提供者黒野たかさんの陰徳を伝える東町児童館わきの碑

第二の故郷横芝は稲荷明神のお告げ

たかさんは、香取郡万歳村（現千潟町）に生まれましたが、縁あって、愛知県旛豆郡横須賀村（現吉良町）出身の黒田由松さんと結婚され、東京で手広く米穀商を営んでいました。由松さんは常に郷里愛知県の豊川稲荷を信仰して屋敷内にも祠を建てて崇拝していました。勿論たかさんも由松さんに劣らないくらいの信者でした。

ある日黒野さん夫妻は、連立って奥さんの生家万歳村を訪れましたがその晩、夢の中で稲荷明神のお告げをいただいたのを寄処として、上総・下総の境を流れる栗山川の畔に二町歩（約二百アール）の土地を買い求めました。それが現在の稲荷様を含む一帯だったのです。土地には住宅もついていましたので、黒野さん一家は時折東京の混雑を避けてはここで過しました。そのうちに近所の人々の親切さや人情味に魅せられ、何時か横芝を第二の故郷と考えるようになってきました。そして郷里横須賀村周辺の知人や親類の人々にもそのことを語り横芝での農業経営を勧めましたが、その時移住して来た人々が、三州開拓者として誠実を称（とな）えられた現在の栗山第四地区等の草分けをされた方なのです。その後黒野さん一家は、東京の家を差配に委せ、殆んど横芝で過していましたが、郷里から移って来た人々の農業経営も軌道に乗ってきた大正十二年一月、ふとした病が急変した由松さんは、馳付けたその人々に見守られ「懐しい人々に見送られる幸も稲荷様のお蔭」と感謝しながら永眠されました。

やがて九月一日の関東大震災です。横芝からも望見できる東京の空に渦巻く不気味な煙を見つめたたかさんは「若しも東京に住んでいたら」と考えるにつけ、稲荷様のご加護に手を合わせるのでした。「それにしても差配の人は――どうぞ無事で――」と祈っていた時、思いがけない嬉しい出来事が起きました。案じていた差配の人が無事な姿を黒野さんの玄関に現したのです。しかも、屋敷内に祭ってあった稲荷様のご神体が奇蹟的にも無事だったので、それだけを抱えて脱出し、ようやく横芝に辿り着いた、というのです。

（次号につづく）

文化財審議会委員　小沢春光氏寄稿

住宅統計調査にご協力を！

十月一日には、全国的な規模で住宅統計調査が行われます。

この調査は、全国約五〇〇万の住宅、世帯を対象とした「住宅の国勢調査」ともいわれる大規模な調査で、当町では曾根含、角田、新屋敷、上町第一と第三、栗山第二、宮前、道貫の各地区が該当しています。

調査は九月二十四日頃から三十日頃までに、調査員が調査票をもってお伺いし、結果は国・都道府県が立案、実施する住宅建設計画、都市計画、環境整備計画などの基礎資料として用いるもので、統計以外の目的に使われることはありませんので安心してありのままをご記入下さるよう、ご協力をお願いします。